

FD 講演会報告

看護学科 笠井恭子

2009.3.31

テーマ 千葉大学看護学部における看護実践能力育成のための取り組みとその評価

ー先駆的な取り組みとしてのカリキュラム改革を中心としてー

講師 千葉大学看護学部 基礎看護学教育研究分野 教授 山本利江先生

日時 平成 21 年 3 月 27 日 (金) 10:40~14:30

場所 福井キャンパス 看護福祉学部教授会室

参加者 38 名 (看護学科教員 21 名、学外参加 17 名)

内容

FD 講演会は、平成 19 年度「看護実践能力を保証するための教育改善の取り組みーOSCE による看護実践能力の総合評価の視点からー」、平成 20 年度「看護学教育に関する改正カリキュラムにおける卒業時到達目標の背景とその意味ー卒業時の到達目標について」を経て今回で 3 回目となり、看護学科教員の共通認識が高まってきている。以下に、今回の講演内容と質疑応答について報告する。

1. 千葉大学看護学部の平成 17 年度カリキュラム改革

1) 改革の背景

- ・各領域の教育内容が重複し合理的でない。
- ・学生は知識、技術の積み上げができていない。
- ・教員は教育にかなりの時間を割き研究時間が確保できていない。

2) 現行カリキュラムの点検、カリキュラム改革の目的の合意と方法

週 1 回、教員懇談会を開催。「教えていることは何か」を明らかにするため、必修科目全授業のキーワードを抽出し帰納的に分析した。その結果、総数 4020 個のキーワードが抽出された。そのキーワードを「看護・人間・環境・健康」の基幹概念と照らし合わせカリキュラム改革の方法を探った。

3) 新・旧カリキュラム平行運用における課題

編入生、留年生のために、新・旧カリキュラムの対比表を作成し対応している。

2. 平成 20 年度時点での看護学部カリキュラムの内容と運用の実際

千葉大学看護学部の特色、教育理念、教育目標および到達目標の紹介

3. 平成 20 年度末に実施した新カリキュラム評価のための基礎調査について

学生、教員、実習病院の看護師長を対象とし、教育目標を土台に作成した 15 項目からなる質問紙調査を実施した。現在、学生の回収が終了した段階である。

(結果の一部紹介)

「4 年間の学習で臨床に出るための必要な教養、知識、技術を学ぶことができましたか？」

→かなりそうである 22% まあそうである 60%

「千葉大学看護学部での 4 年間の学習に満足していますか？」

→かなり満足している 40% まあ満足している 52%とほぼよい評価を得ている。

4. カリキュラム改革と平行して行ったこと

1) 看護倫理の教育内容の改善

実習の中で倫理上ジレンマを感じた場面を学生にピックアップしてもらい、それを「事例」として教材を作成した。看護倫理の授業では、学生を7～8名のグループに分け、それぞれの事例をどうみるかを考えさせた。各グループに1～2名の教員、臨床看護師をファシリテーターとして配置しアドバイスをを行った。

2) 専門職連携教育の実現

学生が将来にわたり、患者中心の医療の実現、チーム医療の実現、チーム内の円滑なコミュニケーションが達成できるよう、医学、薬学、看護学の学生が一斉に授業を受けるものである。ここでは、それぞれの立場を理解し合い「相手は何に価値をおくか」を学ぶ場となっている。

5. 質疑応答

Q：千葉大学ではポートフォリオを実施されているが具体的にどのようなものか。

A：看護実践能力自己評価ポートフォリオは、学生が授業、実習で体験した1つ1つの技術について、技術名、体験内容、評価、今の気持ちなどを記載していくものである。そうすることにより、例えば、2年生の授業で実施した洗髪と3年生の実習で実施した洗髪の違いを比較させ看護実践能力の向上に繋げていく。しかし、現段階では学生の負担となっており教員も指導に活かせていないため改善が必要である。

Q：臨床現場とどのように連携しているのか。

A：千葉大学では臨床の看護師を「臨床講師」として任用する制度がある。臨床講師は、患者は受け持たずに臨床指導に専念でき、実習指導にあたる教員が不足するときなどにその任務にあたる。

Q：学生の看護技術をどのように習得させているのか。

A：看護技術の1/3は「フィジカルアセスメント」にあてている。その講義は、脳神経、胸部、筋骨格系などの重要箇所について、医学部の医師の中で最も精通している先生にお願いしている。演習は基礎、地域の教員、TAがみており、「対象を看護するためのフィジカルアセスメント」という視点を大切にしている。残り2/3は、「生活援助技術」であるが課題解決型で実施している。「医療介助技術（注射、点滴など）」は成人が担当している。「複合技術」として「導尿」を設置し、個別チェック→再学習→再チェックを実施しながら、これまでの学習の仕方を反省させつつ確実な技術の習得を目指している。なお、時間割の5限目は自己学習時間としてあけている。

<講演会風景>

